

2025 年 9 月 13 日

第 60 回加藤周一文庫公開講読会 『続羊の歌』を読む

偽善（前半）

日本学術振興会特別研究員

立命館大学授業担当講師

猪原 透

【本章の梗概】

本章では加藤周一のイギリス旅行中の経験が描かれる。内容は大きく前半と後半に分けられるが、いずれもタイトルにある「偽善」に焦点が当てられている。

前半ではまず、加藤と英国の知識人との交友が描かれている。彼らの多くは《田舎暮らし》を好み、文学や芸術に関する深い見識をもつ一方で、国内外の政治問題に対しても浅薄ではない独自の意見をもっていた。そうした人たちは、同時代の東京には見られなかった。また、《道義》と《政治》のつながり方が、英国人とフランス人とでは違っていることに加藤は気づく。そうして加藤は、自らの《道義》が絶対的なものでないことを自覚しつつ、現在の政治状況のなかで何ができるのかを問い続ける「偽善」の態度を身につけた。（政治上の偽善）

後半では加藤と「愛する娘」（ヒルダ・シュタインメッツ）との関係が描かれる。加藤は「愛する娘」と会う最後の機会にしようとして決意してエディンバラへの旅に出発する。その旅で泊まった宿では「結婚していない男女は同じ部屋に泊まることができない」と告げられ、加藤は「何という偽善的な習慣だろう」とつぶやきながら、西洋におけるキリスト教徒教会の巨大な影響力を実感する。（習慣上の偽善）

旅が終わり、加藤は「愛する娘」と別れてフランスへと戻っていく。加藤は変わらぬ私を想像し、フランスに着いても「愛する娘」に手紙を出すことを約束するが、変わらぬ私というものはないことも自覚していた。（恋愛上の偽善）

【前章と本章の関係】

・『羊の歌』は 2 章でワンセット。前章「海峡の彼方」と本章「偽善」がセットとなって、留学中のイギリス旅行の経験を描いている。ただし同じテーマや人物が 2 章続けて描かれるわけではない。

・「海峡の彼方」

場所：ロンドン 人物：イギリスで出会った外国人（H・ノーマン、下宿屋のアイルランド人やインド人）や労働者との交友 テーマ：日本（人）にとってのイギリス。

・「偽善」

場所：田舎 人物：イギリスにおける英国人、とくに知識階級（美術史家や小説家）との交友 テーマ：フランス・ドイツ（＝大陸諸国）に対するイギリスの文化的特徴

・前章がイギリス社会の描写に重きを置いていたのに対し、本章ではイギリスでの交友を通して加藤がどのような見方を獲得したのかという、加藤の自己形成に重きを置いた内容。

【第1段落（前半）】英国に暮らす英国人（1）：美術史家のS氏

①美術史家のS氏は、オックスフォードの郊外に農家を改造して住み、何年前のものかわからぬ自家用の小さな自動車で、大学附属の美術館へ通っていた。到底動きそうにもみえなかったその車は、一度動き出すと、あらゆる部分から複雑で不思議な音を発し、畑や森の間の小径を、実によく走りつづけた。②二階建ての家は、改造中であつたばかりでなく、S氏がみずから瓦を積んで、建増中でもあつた。彼は二年に一度、中国か日本の美術について本を書き、四年か五年に一度、自分の手で家を一軒建てる。その後何年も経って、北米で彼に会ったときには、四番めの家が間もなくでき上がるころだ、といていた。そのときオックスフォード郊外の農家の改造は、おそらく、その第二号であつたのだろう。建増しの部屋の壁はまだ塗ってなくて、窓には生木の板をはめ、寒気の侵入を防いでいた。③大きな暖炉には、薪が勢よく燃え、ゆらめく焰が、うす暗い部屋のなかのものの影を動かしていた。外は静まりかえり、夜と共に寒さがきびしくなっていたのだろう。暖炉に面して坐っていると、顔は火照ったが、背すじが冷えた。「英国人は暖房の物理的効率よりも、心理的效果を重んじるようですね」と私はいった。「寒いですか」「いや、私は火を見つめていると、飽きませんね。④われわれ日本人は、真冬にも風透しのよい木と紙の家のなかに坐って、真赤におこった炭火を見つめながら、その心理的または詩的效果を味わってきたのです、枕草子から芭蕉七部集まで」。

○第1段落の概要

- ・段落の前半……S氏の「風流な」（日本の文人にも通じる）田舎暮らしの姿を描く。
 - ・段落の後半……S氏の政治的意見が描かれる。その政治的意見ははっきりしたもの。
- ⇒ 第3段落で改めて述べられる、英国人に「田舎暮らし」を好む人が多いこと、しかし英国人は（俗世を離れて天下の政事を忘れるために田舎暮らしをする日本の文人とは対照的に）国内外の政治への関心をもつことを示す具体例としてS氏を取り上げる。
- そしてまた、S氏を通して、英国人の政治観の特徴的な点を示す。

①「美術史家のS氏」

- ・第1～3段落にかけて、加藤が英国で出会った英国人が紹介される。彼らは「英国と私自身」（1964年）で「英国六人の侍」として紹介されたのと同じ人物である¹。彼らは加藤と年齢が10以上違わず、外国に興味をもつ（ただしその外国はフランスではない）こと、政治的意見（ただしそれは反動的ではない）を发表するのをためらわない点で共通する。
- ・S氏（前掲書ではP.S氏）は日本、中国の絵画、とくに清朝の絵画を専門とする人物で、おそらく古い車に乗っているという。手作りの家や暖炉と同じく、「物理的効率」を求める便宜主義・合理主義に抵抗する頑固さを象徴している。

¹ 加藤周一「英国と私自身」（『加藤周一世界漫遊記』、毎日新聞社、1964年）。

・この段落ではS氏の家庭での会話が描かれているが、それは「イギリスでは文化の核心が表に出ていない」(＝街中ではなく、家庭のなかに入らなければイギリス文化はわからない)と加藤が考えているため²。友人を家庭に招くところ(⇨イタリア人)、家庭での会話とカフェでの会話が全く異なるところ(⇨フランス人)にイギリス文化の特徴があるのだという。

②「二階建ての家は、改造中であつたばかりでなく……」

・「二階建ての家」を改造、建て増しし、「二年の一度」中国か日本の美術について本を書く。「四年か五年に一度」家を建て、次に会った時には「四番目の家」が出来上がるところ。

③「大きな暖炉には、薪が勢よく燃え……」

・「あの非効率極まるイギリス式の暖炉」とも書いており³、暖をとるという実用性においてはまったく非合理的であると考えていた。加藤はこれを、「田舎暮らし」への郷愁、そのためには快適さを犠牲にしても構わないという英国人の頑固さを示すものとして言及する。

④「われわれ日本人は、真冬にも風透しのよい木と紙の家のなかに坐って……」

・「寒いですか」と聞かれているが、それには直接答えず、非効率的な英国式暖炉を囲んで焰がゆらめく姿をみる体験には、日本の文化的伝統に通じるものがあるのだと回答する。

・枕草子は、冒頭近くの「冬はつとめて」を念頭に置いているのだろうか。芭蕉七部集(松尾芭蕉門下の人が選んだ俳諧集)についてはよくわからない。『炭俵』序文のことか？

⇒ 平安の王朝文学(枕草子)から江戸の町人の文学(芭蕉七部集)まで、長く広い文化的伝統があるのだという主張。

【第1段落(後半)】

⑤私たちはそこでアール・オヴ・ロチェスターの官能的な詩や、バルトークと中部歐洲の音楽の伝統の話をしていた。⑥S氏の夫人は、室内楽団で弦楽器を弾いていたが、今小さな子供のある「家庭」と音楽家の生活とを調和させることは、不可能にちかいといった。S氏は日本の議会民主主義の話をしていた。⑦「一方には過激な左派があり、他方にはおそらく戦前と変らぬ右派がある。議会民主主義は両側から押しつぶされるのではないだろうか」。⑧押しつぶされるとすれば、両側からではない、とそのとき私は答えたように思う。朝鮮戦争と共に終わった日本のいわゆる《逆コース》がどこまで進むか。左翼は、戦前の日本とくらべれば強くなっていたが、ヴァイマル民主主義のドイツとくらべても、弱味が多いように思われた。ドイツの民主主義を押しつぶしたのは、左右両側の力ではなく、ヒトラーの組織した右の力であった。

² 加藤周一「イギリス、古く新しい国」(『日本の内と外』、文芸春秋、1969年)。

³ 同上。

⑤「私たちはそこでアール・オヴ・ロチェスターの官能的な詩や……」

・Earl of Rochester は 17 世紀イングランドの貴族で詩人。官能的な恋愛詩で知られる。
バルトークは 20 世紀前半のハンガリーの作曲家、ピアニスト。ハンガリーの民族音楽の研究でも知られる（前章「海峡の彼方」第 5 段落でも言及）。

・おそらく実際にロチェスターやバルトークについて話したのだろうが、ここでそのことに言及しているのは、S 氏の時間的・空間的に異なる文化への関心の広さを示すためだろう。

⑥「S 氏の夫人は、室内楽団で弦楽器を弾いていたが……」

・夫人は「小さな子供のいる家庭」と「音楽家の生活」を調和させることは困難であるという。一方、S 氏は日本の議会民主主義における「過激な左派」と「戦前と変わらぬ右派」の調和が困難であると話している。両者の話題は相似形。

⑦「一方には過激な左派があり、他方にはおそらく戦前と変らぬ右派がある……」

・イギリスの知識人（S 氏）の政治観を端的に示したセリフ。「二人の女」の章ではフランスにおける「左翼の人々」の日本政治に対する見方が取り上げられていたが、ここでは「事の本質」がどうであるかが何よりも重視されていた。それに対し S 氏は、政治をまずは対立する両者の力関係のうえに成り立つ駆け引きとして見て、両者に駆け引きが成り立つ程度の共通性がなければ政治も成り立たないと考えている。

⑧「押しつぶされるとすれば、両側からではない、とそのとき私は答えたように思う」

・朝鮮戦争後の「逆コース」に対する危機感から、加藤は議会民主主義を押しつぶすとすれば両側ではなく右からの圧力であろう、と考えた。

・『東京日記』（1960 年）に収録された「議会民主主義」という文章には、このとき S 氏から「日本では議会民主主義が成りたつと思うか」と問われたこと、加藤は議会民主主義の成長に関して日本に固有の障害があることを話したという⁴。

障害（1）：二大政党のあいだで、争点を越えた共通の目標がはっきりしていないこと
「いま〔1960 年時点〕東京で「保守」と「革新」といわれている対立は、実質的には、戦後につくられた民主的制度を中心としてみると、「反動」と「保守」の対立と考えられるのではないかと思う」⁵

障害（2）：民主主義即多数決という早飲み込みがあること
「ナチ政権は、まず議会の多数によって成立した。ナチ政権が民主的であったかなかったかは、権力が「多数」の側にあったかなかったによってきまるのではなく、多数の権力が、「少数」の権利を尊重したかしくなかったによってきまるだろう」⁶

⁴ 加藤周一「議会民主主義」（『東京日記 外国の友へ』朝日新聞社、1960 年）。

⁵ 同上、17—18 頁。

⁶ 同上、18 頁。

【第2段落】英国に暮らす英国人（2）：小説家

①私はまた南仏の会議で識った小説家を、その田舎の家に訪ねた。その大きな家の二階には、いくつも寝室があり、階下には居間や食堂や書斎があったが、小説家は庭の果樹園のなかに小屋を建てて、そのなかで仕事をしていた。「家族が何をしても妨げられない」。しかし家族は彼自身を含めて、三人にすぎなかった。妻君は彼よりも背が高く、年の頃は同じ四十前後、ロンドンの大学でイタリア語を教えていた。その話は整然として条理に適い、小説家も彼女のまえではどこか稚気を脱せぬ学生であるかのようにみえた。②小さい息子は古典語を学んでいて、「しつけ」に申し分がなく、客人に丁重を極めていた。「来年からパブリック・スクールへ行くことになるでしょう」と母親はいった。それは金もちの子供だけがゆく学校である。「たてまえとしては誰でもゆかれるが」と小説家はいった、「事実上労働階級の子弟はいない、金がかかりすぎる」「金の問題だけではなくて、親が子供にどういう教育を望むかということにもよるでしょう」と妻君はいった、「いずれにしても、古典語の教育には、他によい道がありませんね」。③居間の広い窓の外には、白樺のある牧場の斜面が展けていた。牧場には霧が流れ、霧のなかから、影のように放牧の馬が現れると、窓際まで近づいた。「われわれはよい友だちです、他の馬は決して窓のそばまで来ない」と小説家はいった。それは一頭の若い白馬であった。④私は突然、第一次世界大戦のときに濠洲まで軍馬を買いに行った祖父と、その家の暖炉の上に置いてあった馬の肖像を思い出した。それ以来私と馬との間には、どういうつながりもなかったが、「われわれはよい友だちです」といった小説家の声には、実に優しい情がこもっていて、そのことが妙に私を動かした。⑤

○第2段落の概要

・「小説家」の田舎の家の描写を導入として、前半では「小説家」のパブリック・スクールに対する見方（イギリスの階級社会に対する批判的な見方）が紹介される。後半では、一頭の白馬を「よい友だち」と呼ぶ小説家の姿が好意的に描かれる。

⇒ 第1段落と同様に、英国人に「田舎暮らし」を好む人が多いこと、しかし彼らは国内外の政治や社会の問題に対して関心をもつことの具体例として「小説家」を取り上げている。

①「私はまた南仏の会議で識った小説家を、その田舎の家に訪ねた」

・未詳だが、「英国と私自身」ではA・T氏として紹介されている。イギリスでは「かなり認められた作家」でも文学だけで暮らすことは難しく、A・T氏も映画の脚本や放送劇を書いているという。「南仏の会議」とはニースで開催された国際ペン・クラブ会議のこと。「南仏」の章に描かれたイギリス人作家と同一人物か。

・前段落から引き続き「田舎暮らし」をする英国人が紹介されている。その「家」の姿が描写されたあと、住人たちとの会話や人物像が描かれるという流れも前段落と同じ。

・多くの部屋がある家に住みながら「家族が何をしても妨げられない」という理由で、わざわざ庭の果樹園のなかに小屋を建てて仕事をする、繊細な人物として描かれる。

②「小さい息子は古典語を学んでいて、「しつけ」に申し分がなく……」

・西洋における古典語は一般に古代のギリシア語・ラテン語の文語を指す。小説家とその細君は息子に古典語の教育を受けさせるため、パブリック・スクールに入れようとしている。

・イギリスは典型的な階級社会であり、パブリック・スクールはエリートを選抜・養成するための機関として機能している。むろん学費は高額である。小説家とその細君は階級社会に対して批判的な目を向けているが、「他によい道がない」ということで受け入れている。

⇒ 政治や社会への関心と、それへの現実的な対応を示している。

③「居間の広い窓の外には、白樺のある牧場の斜面が展げていた」

・小説家の家には庭もあるが、居間の窓からは白樺のある牧場が一望できた。イギリス（というかイングランド）らしい光景として印象に残ったのだろう。『過客問答』（2001 年）には以下のようにある。

「好き嫌いから言うと、フランスもイギリスもそれぞれ魅力があります。〔中略〕それと、イギリスの田舎が好きですね。〔中略〕イングランドには、低い丘があり、地面が真っ平じゃなくて、少し波立っているような所に、牧場が広がっている。牧場の間に林があり、そのすぐ傍らに屈曲する道があって、森の陰から教会の尖塔が見える。イギリスの教会は先が尖っています。穏やかで平和な田舎の景色です。〔中略〕その田舎の風景がまた、英国人の気質を表している。正直と言うか、ある誠実さがあるんです。たとえば公衆電話の中に傘を忘れてもなくなるとかね、正直です」⁷

④「私は突然、第一次世界大戦のときに濠洲まで軍馬を買いに行った祖父と……」

・陸軍で軍馬の調達にあたっていた加藤の祖父（増田熊六）は日露戦争のころ、豪州まで軍馬の買い付けに赴いている。「第一次大戦のときに」とあるのは記憶違いか（「祖父の家」の章では「日露戦争の頃」と正しく書かれている）。

・小説家が一頭の白馬を「よい友だち」と呼ぶのを聞いて、祖父のことを思い出し、懐かしさを覚えている。「彼はたくさんの小説を書いた。私は、そのいくつかを読んだことがある。それは聡明で、詩情を含んだ話であった。一頭の白馬を友だちと呼んで、いなかの家に暮らすことのできる人の話であった」⁸

⑤雑誌連載時にはあったが、書籍化の際に削除された文章

「彼は親切で、ほとんど人なつこくて、ロンドンで会ったときにも、田舎の家に泊まりに来いといってやまなかったのは、彼であった」

⇒ 不要だと判断して削除したか。

⁷ 加藤周一『過客問答』（かもがわ出版、2001 年）、33—34 頁。

⁸ 加藤周一前掲「英国と私自身」。

【第3段落】英国に暮らす英国人（3）：共通する傾向

私は英国で暮しているうちに、またその後も英国を訪れるたびに、何人かの人々と親しくなった。①それは美術史家と小説家ばかりではなく、神経病学者でもあり、歴史家でもあり、社会学者でもあり、また俳優でもあった。そしてそのなかに、《田舎暮らし》を好む人が多いということに気がついた。②その好みは、官を辞して山野に閑居することを一種の理想とした江戸時代の詩人や学者たちの好みに、相通うところがあるようにも思われた。晴耕雨読。③しかし江戸時代の儒者とはちがって、英国人たちは新聞も読む。英国での私の知人は、誰でも、その職業と専門の相違を越えて、国の内外の政治に、関心を抱き、それぞれの意見をもっていた。そういうことは、少なくとも同じ程度には、東京にはなかった。江戸以来の文人は、天下の政事を忘れて、風流の清談を好んだ。清談は俗事と相容れない。④談たまたま俗事に及び、女心の機微にふれるとしても、国際政治の分析に到っては不粋の到底堪え難いものであった。⑤風流対俗事この伝統的な二元論において、政治が後者に属するという考え方は、強いて西洋の言葉に訳せば、むしろドイツ人のいわゆる精神的文化対物質的文明の二元論にちかいだろう。そこで政治は《文明》の側に属し、《文化》の側には属さない。《リアルポリティーク》の語は、《精神》または《理想》の浸透し難い領域をいうのである。⑥しかし英国人の考え方によれば、《政治》と《精神》、《現実》と《理想》との関係は、むしろ直接のつながりではないはずだが、さればとって、全く断ち切れているというのでもなかった。

○第3段落の概要

・第1～2段落で取り上げた具体例をもとに、加藤が英国で出会った英国人に共通する傾向が説明される。第一に、《田舎暮らし》を好むこと。第二に、国の内外の政治に関心を抱き、独自の意見をもつこと。日本の「江戸以来の文人」とは、第一の点において通じるが、第二の点において異なる。

・「江戸以来の文人」のみならず、ドイツ人も俗事と風流、文明と文化という相容れない二元論を考え方の前提としているが、英国人はそうではないという（詳細は後述）。

①「それは美術史家と小説家ばかりではなく、神経病学者でもあり、歴史家でもあり……」

・いずれも「英国と私自身」のなかで「英国六人の侍」として言及されている人たち。このうち、個人名を特定できるのは社会学者（ロナルド・ドーア。前章でも言及）のみで、他は未詳。

・彼らの多くは《田舎暮らし》を好むという。《 》がついているのは、単に田舎で暮らしているのとは異なる、意識的な田舎暮らし（便利な暖房器具を使わず、あえて不便な暖炉を使うような）という意味を持たせるためか。以下の《文明》《文化》《政治》《理想》は、ドイツ語の文脈で使っていることを示す。

②「その好みは、官を辞して山野に閑居することを一種の理想とした江戸時代の……」

- ・このとき加藤が念頭においているのは石川丈山（1583－1672）だろう。丈山は武士であったが官を退き、晩年には京都・洛北に詩仙堂を築いて詩と学問に没頭した。加藤の『三題嘯』（1965年）に収録された「詩仙堂志」は丈山をめぐる「私」と老人の対話である。
- ・加藤が英国で出会った英国人のなかにも、「山野に閑居する」ことを好む者が多く、その点では丈山のような江戸時代の文人に通じるものがあるという。

③「しかし江戸時代の儒者とはちがって、英国人たちは新聞も読む」

- ・「詩仙堂志」に描かれる丈山とおぼしき老人は、「世の中と折り合って生きる代りに、自分と折り合って生きることじゃ」と述べている。世の中と折り合いたくないから、世の中と離れた山野に閑居して「風流の清談」に専念するのが江戸時代の儒者である。彼らは世の中＝俗事とのかかわりを断つだけでなく、俗事に関する話を聞くことも好まない。
- ・加藤が東京で出会った「江戸以来の文人」（＝同時代の文学者たち）についても同様である。俗事に触れるとしても「国際政治の分析に到っては無粋の到底耐え難いものであった」。はっきり書かれていないが、戦時中の文学者たちの言動（戦争を賛美した文学者や、加藤が「星菫派」として批判した人々）も念頭にあるのかもしれない。
- ・一方、英国人も「風流の清談」を好むが、新聞を読み、「俗事」（国内外の政治）に関心をもつ。英国人は「風流の清談」と「俗事」を相容れないものとは考えていない。

④「談たまたま俗事に及び、女心の機微にふれるとしても」

- ・雑誌連載時は「談たまたま俗事に及ぶとしても、女心の機微までは許されるとして」
⇒ 雑誌連載時は「女心の機微」にふれることは（文人の生き方からみて）かろうじて許される、という意味であったのに対し、書籍においては（許されることは前提として）「女心の機微」は扱えても国際政治までは扱えない、という意味に代わっている。

⑤「風流対俗事この伝統的な二元論において、政治が後者に属するという考え方は……」

- ・「風流」と「俗事」（とくに政治）は相容れないという江戸の文人の発想は、ドイツ人の《文化 Kultur》と《文明 Zivilization》（リアルポリティーク Realpolitik を含む）は相容れないという考え方に近いという。つまり政治をはじめとする公的な領域は、理想や理念とは無縁の合理性が支配する《文明》世界であり、理想や理念の支配する《文化》は逆に、合理性とは無関係に営まれる私的な世界である。
- ・「音楽」の章でも、ドイツ文化の二つの側面して取り上げられている。一方にはモールの「ハンドブック」（内科学の体系的教科書）とアウシュヴィッツ（組織的・合理的方法による虐殺）、他方にはヴァーグナー（非合理的激情）。
- ・ドイツにおいても日本においても、文化と文明の分断は、急速な近代化を通して深まるとされている。《文明》領域における急速な近代化・合理化と、近代化・合理化からの逃避先としての《文化》領域の発見。この点については『日本人の死生観』（1977年）に詳しい。

⑥「しかし英国人の考え方によれば、《政治》と《精神》、《現実》と《理想》との……」

・合理性の支配する《政治》《現実》の世界と、私的な《精神》《理想》の世界が全く断ち切られているのが、江戸以来の文人たちやドイツ人の、《文明・俗事》：《文化・風流》の二元論。対して、《政治・現実》と《精神・理想》を直接結びつけようとして、その困難さに悩むのがフランス人。英国人はそのどちらでもない。

・英国人は、《政治》を《精神・理想》とはまったく無関係の世界（たとえば弱肉強食の権力闘争）と見るわけではないし、かといって《政治》は《精神・理想》によって完全に支配されるものとも考えない。

【第4段落】「政治」と「道義」の関係（1）：東京の《左翼》

①たしかに私は東京で、《左翼》の政治観について聞くとところが多かった。②《政治と文学》。しかしその場合の政治は、英国人のいう《政治》ではなくて、むしろ《政治的イデオロギー》、具体的にはマルクス主義を意味していたようである。東京でわれわれは、政治に関心をもっていたから、《政治と文学》との関係を論じていたのではなく、政治に関心をもつことが少かったから、《政治と文学》の代りに、《政治的イデオロギーと文学》との関係を論じていたのであろう。《政治的イデオロギー》を《政治》という言葉で称んだのは、修辞上の悪い習慣にすぎない。ということを、私は、英国で暮している間、しきりに考えた。③英国で暮すことは、英語で考えることを意味するほかないし、英語で考えることは、日本語で慣れてきた概念の英語への翻訳を伴わないわけにはゆかない。翻訳は当然日本語の意味をはっきりさせるためにも役立つだろう。

①「たしかに私は東京で、《左翼》の政治観について聞くとところが多かった」

・「一九四六年」の章に詳しい。加藤はプロレタリア文学運動の最終世代にあたる『近代文学』の同人に加わり（1947年7月）、いくつかの文章を寄稿している。《左翼》の政治観について聞く機会はむろん多くあっただろうが、この段落で念頭に置かれているのは『近代文学』関係者とのやりとりであろう。

②「《政治と文学》。しかしその場合の政治は、英国人のいう《政治》ではなくて……」

・『近代文学』の関係者、とくに、政治に対する文学の自律を唱えた平野謙（1907－1978）および荒正人（1913－1979）と、それを反革命的だと非難した中野重治のあいだで生じた論争が生じている。このとき彼らが念頭に置いている《政治》とは、共産党および共産主義イデオロギーのことである。やはり「一九四六年」の章で加藤は次のように述べている。

「私はそういう苦勞〔戦前のプロレタリア文学運動〕を経験したことがなかったので、「政治」という言葉から、少数の野党である共産党よりも、まず占領軍と保守党政府のかけ引きを考えた。「政治と文学」と聞いて、ただちに「革命運動と文学」を考える思考上の、または修辞上の、習慣は私にはなかった」

・「英国人のいう《政治》」とは、イデオロギーとは無関係ではないにせよ、議会での力関係と駆け引きにうえに成り立つ実的な仕事である。そうした意味での《政治》に関心がないからこそ、『近代文学』同人たちは「政治的イデオロギーと文学」との関係を論じた。

③「英国で暮すことは、英語で考えることを意味するほかないし、英語で考えることは……」

・加藤は「翻訳の勧め」(1994 年)で、翻訳には「同時的翻訳」(異なる言語への翻訳)、「通時的翻訳」(古典語から現代語への翻訳)、「批判的翻訳」の三種があると述べている。

「第三、批判的翻訳。同じ時代の、同じ地域の、同じ文化のなかでも、特定の集団、殊に強大なマス・メディアを利用することのできる有力な集団が流布する言葉を、自分自身の言葉に翻訳することなしに、その集団を批判することはできず、独自の考えをつきつめることも、正確にものかんがえることもできない」⁹

・こうした「批判的翻訳」を行う際には、一度外国語を経由することが有効な場合も多い。そもそも自分がよく理解していない概念を翻訳することはできないし、外国語に翻訳することでかえって日本語の意味もはっきりすることがある。たとえば、「日本人ファースト」は Japanese First と翻訳する方が、America First (American First ではない) との違いが浮き彫りになり、その意味もはっきりする。

【第 5 段落】「政治」と「道義」の関係 (2) : パリの知識人と英国の知識人

パリでの話題は、いくらか、東京での話題に似ていないこともなかった。①《共産主義的人間》、《反抗的人間》、《組織と個人》、《革命と改良主義》、《大衆運動とイデオロギー》……つまるところ、一般に、何が正しいのか。故にわれわれは何を欲するのか。②しかし英国人たちには、具体的な状況に即して何を欲するかではなくて、何をできるかを考える習慣があったように思われる。『日本政府にできることは、再軍備をおくらせることぐらいでしょう』と彼らはいった、「それは吉田政府がやってきたことではないですか」。③しかし私は中国大陸を侵略した国が、敗戦の後、中国人民を代表する政府と平和条約を結ばず、その政府に対して軍事同盟を結ぶということの全体が、道義上奇怪至極だと考えていた。

①「《共産主義的人間》、《反抗的人間》、《組織と個人》、《革命と改良主義》……」

・《共産主義的人間》は『続 羊の歌』にたびたび登場するルイ・アラゴンの著作。自分よりも「人間」の観念を上におき、自分自身は何も欲しないが、「人間」のために自身の一切を犠牲にする人。国のためでなく「人間」のために、「人間の敵」であるナチスに抵抗する人を指す。

・《反抗的人間》は後の段落で出てくるアルベール・カミュの著作。権力や暴力に対する純粋な「反抗」が、次第に硬直したイデオロギーに支えられた「革命」へと変容していく(政治権力への抵抗が、やがて政治権力へと必然的に変容していくという)問題を扱う。

⁹ 加藤周一「翻訳の勧め」(『夕陽妄語 2』ちくま文庫、2016 年)、136—137 頁。

・要するにパリの知識人にとって最大の関心事は共産主義であり、しかもそれを「人間学」的な問題として（＝人間とは云々、故に人間は〇〇を求めており、したがって××がなされるべきだ、というように）扱っている。つまり、政治は思想的・道義的な問題の一部である。

②「しかし英国人たちには、具体的な状況に即して何を欲するかではなくて……」

・英国の知識人にとって政治とは思想問題ではなく、現在の政治状況（議会での力関係、占領軍と政府の駆け引き）のなかで何ができるかを考える、実際的な仕事である。そのため、パリの知識人と（実際の政治を行う）議会のあいだに深い溝があるのに対して、英国の知識人と議会のあいだにある溝は浅い¹⁰。

・英国人の見方からすれば、占領軍と吉田政府の権力の差は圧倒的であるから、吉田政府に「できること」はせいぜいのところ「再軍備をおくらせること」にすぎない。

③「しかし私は中国大陆を侵略した国が、敗戦の後、中国人民を代表する政府と……」

・敗戦後の日本が中華人民共和国を承認せず、中国・ソ連の両共産主義国を仮想敵国として日米安全保障条約を結んだことを指す。これを「道義上奇怪至極」だと考えていたという。
⇒ 現在の政治状況（占領軍と吉田政府の力関係）のなかで何ができるかを考える英国人の「政治」観に触れることで、政治状況と道義上の問題がどう係り合うのか、という問題が意識されることに。

【第6段落（前半）】「政治」と「道義」の関係（3）：加藤の政治問題に対する態度

①私が英国で覚えたことは、道義と政治とを別のものとして扱うということではない。それをどう関係させるかということである。②私はその頃すでに、政治問題を道義的な観点から扱うことにみずから疑いをもちはじめていた。日本の軍国主義は私からみて不正そのものであった。しかし太平洋戦争を民主主義対ファシズムの戦いという面においてだけ理解することは、「冷い戦争」の成りゆきを眺めた後では、もはや不可能であった。しかしすべての戦争を権力政治の一形式にすぎないと考えれば、日本帝国主義の不正もまた、たかだか程度の問題にすぎなくなるだろう。③そういう私の問題は、またたとえば《反抗的人間》のなかでアルベール・カミュが論じようとした問題にもつながっている。自由な人間は、権力に反抗しなければならない。権力は組織であるから、その反抗が効果をもつためには、反抗もまた組織されねばならない。しかし一度組織されれば、反抗の組織そのものが個人の自由を押しつぶすだろう、とカミュはいつて、芸術家の自由から、共産党の組織と社会正義の関係にまで及ぶ複雑な議論を展開した。議論の要点は、そこでも、道義上の価値と政治的な力関係とが、どう係りあうかということであったろう。私はそういうことを自分の問題として考えていたので、④ある週刊誌上で、労働党のクロスマン氏の書評を読んだときに、ほとんど一種の衝撃を感じた。クロスマン氏は《反抗的人間》の政治に係る議論が、何を思いつ

¹⁰ 加藤周一前掲「イギリス、古く新しい国」。

めて、こうも悲劇的なのか、わけがわからぬ、と書いていた。社会正義の要求―共産党の組織―個人の自由の圧迫―すなわち不正、という議論のすじ道は、著者の欧州政治史に対する無知を示す以外の何ものでもない。フェビアン協会と労働党の歴史をみよ。スキャンディナヴィア諸国の社会政策をみよ。社会正義の要求に応えるみちは、共産党とその革命の他にいくらでもあり得るではないか。⑤

①「私が英国で覚えたことは、道義と政治とを別のものとして扱うということではない……」

・第3～5段落で英国人にとっての《政治》について説明してきた。そのなかで、東京の《左翼》やフランスの知識人が《政治》を思想問題の一部として扱っていることと対比して、英国人にとって《政治》は議会や政党の力関係を踏まえて「何をできるか」を考える実際的な仕事であることを強調している。しかしそれは、ドイツ人の《リアルポリティーク》（＝政治は道義の問題とは無縁の生存競争）とも異なるのだ、ということを改めて確認している。

②「私はその頃すでに、政治問題を道義的な観点から扱うことにみずから疑いを……」

・加藤は大日本帝国の敗戦を予想していたが、それは戦争の実際を知っていたためというより、加藤のもつ進歩史観のためであった。歴史は前に向かって進むものであり、「遅れ」を基礎とする日本ファシズムと「進み」を基礎とする西洋民主主義が戦えば、民主主義の側が勝利する。

「予想の的中は、一般に、必ずしもその予想の前提を正当化しないことは、いうまでもない。しかし問題は、知識の確実さではなく、一種の道義感であった。天網恢恢疎にして漏らさず」（「信条」の章）

・しかし、「冷戦」が始まると、「道義」を体現するかにみえた占領軍が「逆コース」を推し進めていき、また加藤自身も西洋を社会を実際にみることで、「遅れ」と「進み」の対立、「遅れ」から「進み」への進歩の過程として政治を理解することの限界を感じるようになる。
・とはいえ、戦争に反対する友人をその戦争で失った加藤としては、戦争を生み出す政治を「道義」と完全に切り離して考える《リアルポリティーク》は受け入れられない。だからこそ、政治と道義はどのように結びつくのか、という問いに向き合う必要があった。

③「そういう私の問題は、またたとえば《反抗的人間》のなかでアルベール・カミュが……」

・《反抗的人間》については第5段落でも触れた。個人の自由という絶対的な道義的価値と、それを押しつぶす政治権力の（道義が入り込む余地のない）必然性のあいだで生じるジレンマを扱った著作。

・ただしこれも英国人からみれば、「絶対的な道義的価値」（思想）と「政治権力の必然性」（思想）の矛盾という、純粋な思想問題に関する抽象的な議論であって、政治の実際に関する議論とは考えられない。

④「ある週刊誌上で、労働党のクロスマン氏の書評を読んだときに……」

・イギリス労働党の有力な政治家である Richard Howard Stafford Crossman (1907-1974) が *New Statesman and Nation* 誌 (1954 年 1 月 16 日付) に書いた書評を指す¹¹。

・クロスマンの見るところ、カミュの著作は、特殊なケース (共産党と革命) を過度に一般化したものである。社会正義 (自由) の要求は必ず政治権力 (共産党) による自由の圧迫に帰結するというが、社会正義を実現する手段は共産党以外 (労働党など) にもあるではないか。実際的な仕事としての政治とは、現実のなかで何をできるか考えるものであって、カミュは政治を苦悩に満ちた会話の題目にしているに過ぎないのではないか？

⇒ カミュの苦悩は文学者のサロンでは受けるかもしれないが、実際の政治とは何の関係もない、とバツサリ。

⑤雑誌連載時にはあったが、書籍化の際に削除された文章

「そのとおりだろうが、そこで書評家は、あきらかに、著者とは別の問題を考えていた。そしてそのくいちがい、英仏の知的社会の相違をよく象徴しているように思われた。しかしそれだけではなかった」

【第 6 段落 (後半)】

……そういう批評を読みながら、①私は東京大学の医学部の研究室で三好和夫博士から聞いた言葉を思い出さないわけにはゆかなかった。三好さんはいった、「よい問題を扱わなければ、よい仕事はできない。どうしても解答の得られないときには、問題そのものを検討しなければならない……」。政治については、カミュの問題よりも、クロスマン氏の問題が、よい問題であるのかもしれない、と私は考えるようになった。②絶対的な道義的価値と、権力政治の動かし難い現実とを、どう折り合わせるか、と問う代りに、相対的な価値を、力関係だけで決定されるのではない政治的現実のなかで、実現するには、どういう具体的な道があるか、と問うこと。「おまえは共産主義に賛成するか。反対するか」という問いに、もし私が英国人であつたら、反対し、中国人であつたら、賛成するだろうと答えること。また「おまえは社会民主主義に賛成するか、反対するか」という問いに、もし私がスウェーデン人であつたら賛成するだろうし、キューバ人であつたら反対するだろうと答えること。条件つきでない答えをもとめることは無駄であり、意味のある答えは条件つきでしかあり得ないと考えること。そういう考え方はその後の私の政治問題に対する態度を決定したと思う。③その後私は政治に係ること甚だ少く、わずかに政策甲の政策乙よりも望ましい所以を、諸家の驥尾に附して主張したにすぎない。その主張の多くは、実現されなかった。しかしそのために私が意見を変えることも、また「政治に幻滅する」ということも決してなかった。

¹¹ 同上、415 頁。

①「私は東京大学の医学部の研究室で三好和夫博士から聞いた言葉を……」

・三好和夫については「内科教室」の章に詳しい。戦中から戦後直後の加藤に、血液学研究の手ほどきをした人物。

・加藤がここで三好博士の言葉を引いているのは、クロスマン氏の問題の立て方が、加藤の慣れ親しんだ科学的なものの見方・考え方と親和的であることを示すため。科学は「問題の立て方」が重要であり、解けない問題は良い問題ではない。また、科学に「絶対」はない。

「英国では、絶対に正しいというものはない。何が正しいかという問題を、政治の領域で出すのは賢明ではない。どちらがより正しいか、何が良いかではなくて、何がより良いか。〔中略〕これはアングロ・サクソンの文化と言っているかもしれませんが、科学的なものの考え方に深く係っていると思います。科学的なものの考え方では、ある理論が確かに正しいとか、これが一番良いとは言わない。比較的確からしいということなんです」¹²

・「信条」の章では、「認識論的には、私は懐疑主義者」で、「道徳的信条は、そのどれをとっても、つまるところ私にとって絶対的なものではなかった」ことが語られている。

②「絶対的な道義的価値と、権力政治の動かし難い現実とを、どう折り合わせるか……」

・イギリス滞在中にここまで明確に考えていたのかは不明だが、1960年の安保改定問題に対する自らの政治的態度（「審議未了」の章）が何に由来しているのかを説明している。

・「絶対的な道義的価値」（自由のような普遍的価値）と「権力政治の動かし難い現実」（共産党・革命運動）をどう折り合わせるかというのがカミュの問題である。これはそもそも折り合わせるための具体的な道筋が見出し難く、また、折り合わなかった際には「絶対的な」価値が傷つけられたことになるので、絶望に陥ってしまう。

・これに対して、「現実の中で何ができるか」が重要だという英国人の政治観からすれば、実現を目指すのは現在の状況下において望みうる「相対的な価値」であり、政治的現実も「力関係だけで決定される」動かし難いものとはみなされない。「相対的な価値」であるから、完全にでなくても何ほどこ実現できたならば、行動した価値はあったと考えられる。また、政治的敗北それ自体も「現実の中で何ができるか」を考えるための貴重な経験となるだろう。

③「その後私は政治に係ること甚だ少く、わずかに政策甲の政策乙よりも望ましい所以を…」

・加藤は「私は『政治』を好まない」としつつ、『政治』は、こちらから近づかなければ、向こうから追ってくる何ものかである」と述べている¹³。

・加藤は自身が「少数派」とであると自覚しており、自身の政治的発言が「多数派」のものとなる可能性は低いと考えていた。それでも政治的な発言を辞めなかったのは、政治に絶対を求めず、「現在の状況下において何ができるか」が大事だと考えていたためである。

¹² 加藤周一前掲『過客問答』、21頁。

¹³ 加藤周一「私の立場さしあたり」（『著作集15』、311頁）

【第7段落】「政治」と「道義」の関係（４）：「偽善」の価値

おそらく英国で私は政治についての特定の考え方ではなく、むしろ政治に対する一種の態度を覚えたのであろう。①道義の感情と直接にむすびつけて政治問題を考えぬ態度——それは政治問題を根本的には道義の感情に即して考えることをやめないために、どうしても必要であったように思われる。英国人の考えそのものは、むろん、人によって大いにちがう。しかし彼らの話し方には、ほとんど独特の様式があった。②対象からの知的距離と、価値への自己拘束的志向との、微妙なつり合い。英国の外交政策が、他の国の場合よりも、「偽善」的であったかどうかは大いに疑わしいが、もしかりにそうであったとすれば、それは一国の外交政策に望み得る最上のことであったろう、と私は考える。けだし「善」の値うちをみとめなければ、「偽善」の必要もまたないはずである。現にヒトラーの政治は、「偽善」的ではなかった。またみずからの「善」を確信し、相手の「悪」を疑わなければ、「偽善」の余地もない。現に反共十字軍を唱えていたダレス氏は、盲目的ではあっても、「偽善」者ではなかった。

①「道義の感情と直接にむすびつけて政治問題を考えぬ態度——それは政治問題を……」

・加藤にとって政治問題への関心は「道義の感情」から生じるものである。たとえば「古きよき日の思い出」の章では、ヴェトナム戦争で25万人の子供が殺されていることについて「そんなことは知りたくない」「知ったところで、どうしようもないじゃないか」という「旧知の実業家」と、「それでも知っていたい」という加藤のやり取りが描かれている。

「前者がまちがっているという理くつは、私にはない。ただ私は私自身が後者に属するということを感じるだけである。しかじかの理くつにもとづいて、はるかに遠い国の子供たちを気にしなければならぬということではない。彼らが気になるという事実がまずあって、私がその事実から出発する、または少なくとも、出発することがある、ということにすぎない」

・あとの「審議未了」の章でも、やはり「道義感」（＝「いくさ」によって他人に死を強制することは正しくない）から出発することが語られている。「いくさ」を避けるためにどのような手段をとるべきかは、道義感とは無関係の情勢判断と理屈の問題である。しかし、それゆえにこそ、その時・その場所においてより良い手段を探し続けなければならない。

②「対象からの知的距離と、価値への自己拘束的志向との、微妙なつり合い……」

・対象からの知的距離＝「こうであるべき」という希望や、「こうであってほしい」という希望的観測に左右されず、対象と距離をとって現実を客観的に分析しようとする意志。

・価値への自己拘束的志向＝「こうするべきだ」という意識＝道義感

・英国の外交政策が、現実を客観的に分析し、その中でできること（相対的な善）を実現しようとするものであるとするなら、それは「絶対的な善」ではないことを自覚しつつ行われる善＝偽善である。だが、それは「善」を目指そうとしない外交（ヒトラー）よりも、「絶対的な善」を押しつけようとする外交（ダレス氏）よりも勝る。